

心に残る式を

稲葉早苗さん
宮島(24歳)



今年の1月、友達の結婚式に出席しました。教会で行われたその結婚式場の入口で、私は「おやっ」と感じたことがありました。

それは、結婚式という、その多くが、〇〇家、〇〇家結婚披露宴会場と書かれています、その案内板には本人たちのフルネームで書かれてあったのです。

ショー的な催しをふんだんに盛り

込んだ今の披露宴と違い、祝辞を中心とした質素なものでした。

でも、本当に二人をよく知っている人たちの心温かい祝辞ばかりで、儀礼的な祝辞はありませんでした。

祝辞に耳を傾ける二人の様子もとても幸せそうでした。

儀式として、家と家との結びつきに重点を置きがちな今の結婚式、もちろんそのことも大切ですが、結婚する本人たちの心にいつまでも残るような式を挙げられたらと思います。

結婚式本来の姿を

土屋洋子さん
上横割(42歳)

3人の娘の親として、あと何年か先にはやってくる娘たちの晴れ姿。

親として一生に一度のこの日のできる限りのことをしてやろうと願うのはこの親も変わらないでしょう。

しかし、昨今の結婚式を見ると、余りにも商業ベースに乗せられ、画一的な個性のない式が多過ぎる感じがします。

世話になった方や友達に祝福して



〔商業ベースに乗らずに…と土屋さん〕

もらうと同時に、これからの私たちの出発点を見守ってほしいと言うのが結婚式の本来の姿ではないでしょうか。一つの儀式としての側面もありますが、出席されたお客様が、きょうの式はよかったと思ってくれるか、やれやれ一つの義理が済んだと思って帰るのでは大変な違いです。

ある程度の費用がかかるのも仕方がない今の結婚式。二人のためにもお客様のためにも単に式場にまかせるのではなく、親も一緒に、結婚式本来の姿を考えてみる必要があるのではないのでしょうか。

「富士山をテーマとした市民憲章は、市民の輪を広げる礎となりはしないだろうか。私は私なりに友達の輪を広げたい。」と書きつづった渋谷さんの作品。市民憲章を自分の生活憲章にしたいと言った。

「神経質で内気な性格なので意思の伝達手段として、何となく書くことを覚えました。」と言った渋谷さんは、時には市のびと書いたことを書き表わしたつもりです。「自分の弁。今は家事と育児に大わらわ」と言いながらも市政モニターとして、市政の勉強にも励む頑張りやさん。



市民憲章普及推進論文・作文コンクール一般の部で、みごと市長賞に輝いた。

し ぶ え けい こ
渋谷恵子さん

民芸芸(随筆の部)などにも投稿するなかなかの文才の持ち主。論文というより随筆調の作品を「普段と比べて、自分らしい書き方ではなかったけど、のび

長野県出身で富士市へ来てちよつと10年、富士川の土手から見た富士山の雄大さが忘れられないという。ご主人と二人の子供の四大家族。